

「10年前には『個人の問題』としてタブー視されていた『自殺』問題を、社会全体の問題として対策の必要性を訴え続け、国の自殺対策に大きく貢献した清水康之さん。10年後を清水さんはどう思い描いているのでしょうか。」

清水康之さん

大きな風が吹いた この10年間

10年後の社会、そして、10年後の自分はこうなっているのか。正直言って、想像もつきません。10年前の自分がまるで予想もしなかった大きな変化のなかに、今の僕は立っているのですから。

10年前、僕はNHK札幌放送局のディレクターとして、番組を作っていました。自殺者が一気に増えた頃でもありません。

「お父さん死なないで——親の自殺、遺された子どもたち」（平成十三年放送）という番組を作ったことがきっかけで僕は、現場に入ってから自殺問題に直接取り組み、NHKを退職しました。N

P.O法人の自殺対策支援センター「ライフリンク」を設立したのは平成十六年のことです。

自殺対策の法制化を求める「3万人署名」には、ひと月半で10万人もの署名が集まり、国が動いて、平成十八年六月に「自殺対策基本法」が策定されました。これは大きな社会変化でした。これまでは、人の生き死には個人の問題であるとして、自殺はタブー視されてきたのですが、社会の問題として位置づけられたのです。

じつは、ライフリンクの活動は、この法律ができたらやめようと思っていたのですが、自殺対策が自律的な軌道に乗るまではと、続けることにしました。

これまでに行なってきたことは、一つは自殺の実態解明。自死遺族への聞き取り調査五〇〇人分



しみず・やすゆき ●昭和47年、東京都生まれ。NPO法人ライフリンク代表。高校中退後、平成8年、国際基督教大学教養学部卒業。同9年、NHKに入局。自死遺児への取材から自殺の問題にかかわるようになる。16年、NHKを退職しNPO法人自殺対策支援センター「ライフリンク」を設立、代表を務め、自殺対策基本法制定に奔走する。21年より、内閣府参与。著書に上田紀行さんとの対談集『自殺社会』から「生き心地の良い社会」へ」など。

です。

どんな状況でも、 必ず光は見つかる

が終わったところでは、警察の自殺に関するデータ（地域ごと・月別）も公表されるようになりました。もう一つは、自死遺族支援の全国キャラバン。自治体、民間団体、住民、メディアに力を合わせて取り組んでもらうための第一歩としてのシンポジウムを展開しました。地域の自殺対策モデル作りも推進中。昨年十一月からは内閣府参与として施策立案にもかかわるようになりました。

何もないところからライフリンクの活動を始めた頃は、無風状態のなか、風をおこそうと一人で行くようなしんどさがありました。

ここまで大きな風が吹くと、風を待っていた人がたくさんいたの

さて、これからの10年。初めに言ったように、10年後の自分がどういう職業で、どういう立場にいるのか、まるでわかりません。けれども、少なくともこの10年間、僕はできるかぎり妥協せず、やるだけのことはやってきました。10年後も、何と向き合っているか、妥協しない気持ちを持ち続けていたいですね。

この活動を通して、僕のなかには「世の中、捨てたもんじゃない」という実感が湧いています。諦めムードが社会を覆っている昨今で

すが、まだ諦める段階ではないと思うのです。むしろ、こういう状況にあっても、精一杯生きていく人はたくさんいるし、何とかこの状況を変えていこうと思っている人、あるいは、自分の悲しみやつらさと向き合いながら、回復していく人たちもいます。

痛みをしいられる人たちがたくさんいる時代なのは事実ですが、痛みを力として、他の人たちに痛みが及ばないような社会をつくっていききたいという思いを、ものすごく感じます。この力がきつという方向に向かっていくという強い予感もあります。

社会としては、傷を負った人たちが回復できる社会にしていかなければなりません。そのためには、一人一人が回復する力をつけるとともに、安心して悩んだり悲しんだりしたうえで、よりその人らしい人生を歩んでいける環境をつくるのが大切です。

僕はずっと自殺対策に取り組んできましたが、その先にある目標とは、とどのつまり「生き心地のいい社会」づくり。ライフリンクは二年後に解散するつもりですが、10年後も、何らかの形で、生き心地のいい社会づくりにかかわっているでしょう。活動が忙しくて休学してしまったロースクールにまた通って、弁護士をめざす



平成19年7月から始まった「自死遺族支援全国キャラバン」。全都道府県でシンポジウムが開催された。写真は、平成19年7月、東京都で行なわれたもの。政治学者の姜尚中さんも参加（左から2人目）。

自殺のサインを見逃すな ——足立区の取り組み

東京23区の中でも自殺者の多い足立区は、清水さんが代表を務めるNPOライフリンクと提携して、区の自殺総合対策のネットワークづくりに取り組んでいる。負債、病気、失業、うつ……といった幾つもの悩みを抱えている人たちは、従来の縦割行政の各部署の窓口だけでは悩みは解決せず、自殺に追い込まれやすい。その対策の一つが、区役所職員たちのゲートキーパー（門番）研修。最初に相談者に対応した区の窓口の職員が、相談内容や態度に表われる自殺のサインを見逃さず、他の窓口や、福祉事務所や弁護士、医療機関といった他機関につないで連携支援をめざすというもの。各機関へのつなぎ役となる「心といのちの支援」窓口専任も2人置き、相談者が必要な支援を受けられる体制づくりを進めている。



自殺予防の体制づくりを進める足立区の職員に地域ネットワークの重要性を語る清水さん

かは未定です。

中途失聴の作曲家、佐村河内守さんがこう言っています。「闇が深ければ深いほど、小さな光が明るく見える」と。10年前の僕は、活動をどう展開していけばいいのか難題続きで、闇に溶け込んでしまっている不安の中にいました

が、たくさんのお会いと支えに恵まれ、「どんな状況にも必ず光はある」と、今は思います。このことは、個人も社会も同じこと。痛みと向き合って進んでいけば必

闇の中に 光を見いだす

清水 康之
湯浅 誠

『闇の中に光を見いだす』岩波ブックレット 525円（税込）
「年越し派遣村」村長を務めた湯浅誠さんと、市民活動の現場から見える日本社会の姿、社会への希望を語り合う対談